

2022年 6月 5日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教 「神が人を創造されたのは」 マタイによる福音書 19章1-12節 高橋彰

◆離縁について教える

19 イエスはこれらの言葉を語り終えると、ガリラヤを去り、ヨルダン川の向こう側のユダヤ地方に行かれた。2大勢の群衆が従った。イエスはそこで人々の病気をいやされた。

3 ファリサイ派の人々が近寄り、イエスを試そうとして、「何か理由があれば、夫が妻を離縁することは、律法に適っているでしょうか」と言った。4 イエスはお答えになった。「あなたたちは読んだことがないのか。創造主は初めから人を男と女とにお作りになった。」5 そして、こうも言われた。「それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。6 だから、二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」7 すると、彼らはイエスに言った。「では、なぜモーセは、離縁状を渡して離縁するように命じたのですか。」8 イエスは言われた。「あなたたちの心が頑固なので、モーセは妻を離縁することを許したのであって、初めからそうだったわけではない。9 言っておくが、不法な結婚でもないのに妻を離縁して、他の女を妻にする者は、姦通の罪を犯すことになる。」10 弟子たちは、「夫婦の間柄がそんなものなら、妻を迎えない方がましです」と言った。11 イエスは言われた。「だれもがこの言葉を受け入れるのではなく、恵まれた者だけである。12 結婚できないように生まれついた者、人から結婚できないようにされた者もいるが、天の国のために結婚しない者もいる。これを受け入れることのできる人は受け入れなさい。」

聖書 新共同訳(C)日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987,1988

マタイによる福音書18章は「教会」という集まりはどのような意味や使命を持つ共同体であり、人がどのように大切にされるべき交わりなのかを「一匹の羊」や「仲間を赦さない家来」の譬えなども交えて語られていました。19章は「家、兄弟、姉妹、父、母、子供、畠」(19:29)にあるように、家族関係に関わる内容が書かれているとも読みます。夫と妻について、こどもについて、そして家の財産についての話が続きます。共通して言えることは、当時のユダヤ社会(またおそらく他にも多くの社会)が大きな家族単位で生活し、家長であった男性が大きな権限と富を有して采配し、女性やこどもたちは男性の所有する財産とおなじように見なされ扱われがちであつただろうことを考えると、イエスの教えはそうした価値観を打ち破るような内容であり、驚きをもって聞いた人びとも多かったことだろうと想像します。当時の社会は生活するための家事作業も、仕事も、手間と時間がかかるわけで、少人数で暮らす、ましてや一人で暮らすなど難しく、大家族で暮らし、さらに雇い人や家畜もあり、家族という共同体につながっていることが生き延びる具体的な支えになっていました。なので家長である男性が病や事故、戦争などによって亡くなってしまったら配偶者の女性とそのこどもたちは生活が非常に困難になります。旧約の律法に「やもめ」への特別な配慮が記され「やもめ」たちにまつわるエピソードが数々あるのも、神が社会的弱者に陥られた彼女たち(やこどもたち)を顧みておられ、神の働きが起こる事を伝えているからだとも言えましょう。

イエスは大家族とその家長である男性たちが当然と考えていた家族共同体とは異なったあり方を考えておられ、そこに生きる人びともっと貴い価値や尊厳、いのちを見ておられ、家の単位とは違つた一人一人の生や、そこから出る、離れざるを得ない人びとの生き方をも積極的に指し示されています。実はそれは、律法と預言者の教え中にも語られていることだったのです。

1-2節にある病人の癒しも無関係ではありません。大きな共同体では病を負った者たちが数から除外され、時には見捨てられさえしました。病者たちが身を寄せ合って暮らした村がありました。イエスはそのような人びへの特別な働きかけ、励ましをなされました。

ファリサイ派の人びとはイエスにわざと難問をふっかけるために「夫が妻を離縁すること」について質問しました。この前提には、“律法にあるのだから”(申命記24:1)という理由づけで夫は自分の意思で妻をなんとしても理由づけて離縁させられるという傲慢な考え方、女性に対する不誠実さがあります。(もちろん、当時のユダヤ社会は女性からの離婚申立権利もあったそうですが)。イエスは離婚に対する禁令ということではなく、このような考え方をする者たちの前提を問い合わせさせようとするような応答をされています。創世記1章、2章の二つの人間の創造物語を引用して語ります。「男」も「女」も「神のかたち」に創造された者であるという宣言は貴重です。夫が妻を持ち物のように簡単に手放すことをイエスは許しません。さらに、一組のパートナーが「父母を離れて」一体となるという価値観は大家族的な価値観を超えた人々の生き方、あり様をも示し、人びとに価値観の転換を示します。思えば創世記の最初の夫婦、アダムとエバの物語も、エデンの園という大きな家からカップルになった二人で出ていくという話の展開です。

イエスの言葉を聞いた弟子たちは、そんなものなら結婚しないほうがましです。何の得にもなりません、と言ったのです。するとイエスはさらに別の生き方をする者たちの存在も語ります。「結婚できない者」と訳されている「ユヌコス」は他所では「宦官」とも訳されます。「去勢された者」で表現されるのは、生来的に、または人生途上の負傷などで、また生き方として、性別のカテゴリーでくくられない生き方をする者たちがいることにイエスは言及されます。現代で言えば性的マイノリティの存在も含みうる内容です。また、イエスご自身も「天の国のために」身を献げ、家を出て、神の招きに応えて生きる人びと共に交わりの中で生きられたのですからここでいう「ユヌコス」の一人です。ペンテコステによってイエスの靈を受けて誕生させられた「教会」という集まりは、今に至るまで、多様な者たちが招かれて、共に生きるために共同体です。